

## 【武徳二年の地図を読み解く】 唐朝拡大と群雄割拠の転換点

### 1. イントロダクション：武徳二年、パズルのピースが動き出す

西暦619年、すなわち **武徳二年**。この年は、崩壊した隋王朝の残影が完全に消え去り、次代の覇権を巡る「鼎立の構図」が鮮明になった、歴史の重大な転換点です。長安に拠る「唐」は、関中を固めて天下統一への歩みを加速させますが、その前途には巨大な壁が立ちはだかっていました。東の都・洛陽を制し、隋の皇泰主から帝位を奪った **王世充（鄭）**。北東の河北を統合し、隋の復讐者という大義を掲げる **竇建徳（夏）**。そして、北方から唐の創業の地・太原を飲み込もうとする **劉武周**。武徳二年の地図は、これら有力勢力と、その狭間で生き残りをかける地方群雄たちが、自らの命運を賭けて唐へ帰順するか否かを選択する「巨大なパズル」の様相を呈していました。

#### 武徳二年の主要勢力図

勢力名, 指導者, 主要拠点, 唐に対するスタンス

唐, 李淵（高祖）, 長安, 正統な天命を主張し、全国統一を目指す

鄭, 王世充, 洛陽, 敵対。 隋を篡奪し帝位に就く。唐の東進を阻む最大の壁

夏, 竇建徳, 洺州, 敵対。 隋の遺臣を厚遇し、河北に強大な独立勢力を築く

定陽, 劉武周, 馬邑・太原, 敵対。 突厥の支援を受け、唐の根拠地である太原を猛攻

天下の趨勢が三勢力に集約されていく中、まずは「東の都」洛陽で、一人の男がどのように野望を剥き出しにしていったかを見ていきましょう。

### 2. 洛陽の変貌：王世充の「鄭」建国と野望

洛陽を支配する王世充は、当初は隋の遺臣として振る舞っていましたが、武徳二年に入るとその本性を現します。彼は人心を掌握するため、太尉府の門外に\*\*「三牌」\*\*を立てて広く人材を募集しました。

#### 王世充が設置した「三牌」の目的

- **文学才識の牌**：時務を救う知恵を持つ賢者を求める
- **武勇智略の牌**：敵陣を陥れる勇者を求める
- **冤滞（えんたい）の牌**：不当な抑圧を訴えたい者を求めるしかし、その実態は欺瞞に満ちたものでした。王世充は上書を持つ人々に懇懇に接し、口先では喜び勇むような「甘言」を弄しましたが、実際にその意見を採用したり、恩施を施したりすることはありませんでした。**王世充の言動と実態の乖離** 「王公は、いたずらに児女（じじょ）のような優しさを見せて愚か者を喜ばせているが、その本性は狭量で欲深く、真の恩情がない。これでは大業を成すことなど到底できまい」 — **王世充の毒牙を察知し、内応を試みた崔孝仁の言葉**王世充の猜疑心は次第に狂気を帯び、あるとき宮中で賜った食事を「毒が入っている」と疑って吐き出した後は、二度と朝廷に顔を出さなくなりました。最後には皇泰主（楊侗）を幽閉し、自ら\*\*「鄭」の皇帝\*\*を称したのです。

### 3. 隋の終焉と新たな覇者：宇文化及の滅亡と竇建徳の台頭

北東部では、隋の煬帝を殺害した逆賊・**宇文化及**が、唐の淮安王・李神通に追われて聊城（りょうじょう）へと逃げ込んでいました。しかし、この篡奪者に引導を渡したのは、河北の英雄・**竇建徳**でした。竇建徳は「私は隋の民である。君主の仇を討たねばならぬ」という大義を掲げ、聊城を陥落させて宇文化及を捕らえました。特筆すべきは、同じく「皇帝」を称しながらも、王世充とは対照的な彼の「徳」のあり方です。

竇建徳の「徳」を示す足跡

- x **隋への忠義**：宇文化及を処刑する際、煬帝のために白い喪服（素服）を纏い、声を上げて哭し、哀悼を尽くした。
- x **徹底した無欲**：戦勝品はすべて将士に分配し、自身は肉を食わず、妻も贅沢な絹を身に着けない質素な生活を貫いた。
- x **隋の遺臣への礼遇**：蕭皇后を丁重に迎え、裴矩などの旧臣を能力に応じて重用し、国の法度を整えさせた。
- x **去る者を追わず**：関中（唐）や洛陽（鄭）への帰還を望む者には、路銀と護衛を与えて送り出した。北東部が竇建徳の「徳」によって統合される一方、西方の涼州でも、一人の「皇帝」が没落の時を迎えていました。

### 4. 西域の扉が開く：李軌の没落と河西の帰順

河西（涼州）で自立していた**李軌**は、唐の策謀によって内側から崩壊します。唐の朝廷に仕えていた安興貴は、「自ら赴いて李軌を説得し、聞き入れねば排除する」と高祖に申し出ました。武威に入った安興貴は、李軌に対し「天命」を説きます。

地政学的対立：李軌 vs 安興貴

主張者, 拠り所, 主な論拠

李軌, 山河の險, 「我らには強固な山河の守りがある。唐がいかに強大でも、我らをどうすることもできまい」

安興貴, 天命の理, 「唐の隆盛は人力ではなく天啓。河西の民を率いて唐に帰順することこそ、一族を救う唯一の道である」

説得に応じない李軌に対し、安興貴は内応によって兵を挙げます。追い詰められた李軌は、妻子とともに\*\*「玉女台」\*\*に登り、別れの酒を酌み交わした後に捕らえられました。これにより、西域への道は唐の手に落ちたのです。

### 5. 北方の危機：劉武周の侵攻と齊王元吉の逃亡

西が安定したのも東の間、北方の**劉武周**が突厥の軍勢とともに、唐の「王業の基」である太原（晋陽）へ襲いかかります。ここを守っていたのは高祖の息子、齊王・**李元吉**でしたが、その振る舞いは言語道断でした。

李元吉の「不善」なる行動

- **民を的にする**：道ゆく人を矢で射て、その矢を避ける様子を見て楽しんだ。
- **乳母の殺害**：諫言した乳母の陳善意を、怒りに任せて壮士に命じ殴り殺させた。

- **無責任な逃亡**：敵軍が城下に迫ると、部下に「お前が守れ、私は精銳を率いて出撃する」と偽り、夜陰に乗じて妻子と共に長安へ逃げ帰った。太原陥落の報に、高祖は「河東（黄河の東）を放棄し、関中のみを守るべきか」と弱気な手勅を出そうとします。しかし、ここで立ち上がったのが **秦王・李世民** です。「太原は王業の基、国の根本。河東は富実にして、京邑の資するところなり。もし挙げてこれを棄つるは、臣ひそかに憤恨す。願わくは臣に精兵三万を仮さんことを。必ず武周を平殄し、汾晋を克復せん」この決然たる上表を受け、唐は国家存亡を賭けた太原奪還へと動き出します。

## 6. 朝廷の光と影：劉文靜の処刑と権力争い

外敵との戦いの裏で、唐の朝廷内部では痛ましい悲劇が起きていました。建国の第一の功臣である **劉文靜** が、裴寂との不和から処刑に追い込まれたのです。**補足：劉文靜の功績と裴寂への不満** 劉文靜は「自分の才略は裴寂の上だ」という自負があり、官位が裴寂の下にあることに強い不満を抱いていました。酒に酔って「いつか裴寂の首を切つてやる」と叫び、刀で柱を叩くなどの乱行が、謀反の疑いとして利用されました。李世民は「彼は挙兵の際の第一の策士であり、決して反逆者ではない」と必死に助命を請いましたが、高祖は寵愛する裴寂の「文靜を残せば後患になる」という情実を含んだ進言を容れ、処刑を断行しました。組織の力学が、功臣の命を飲み込んだ瞬間でした。

## 7. 総括：武徳二年の地理的変遷

内部の痛みを抱えつつも、天下の趨勢は「唐」へと傾きつつありました。武徳二年の終わりまでに、多くの英雄たちが、唐の天命を信じてその軍門に降りました。

武徳二年：唐への主な帰順者リスト

人物名, 管轄地域, 帰順の背景とエピソード

李世勣（徐世勣）, 黎州, 竇建徳に敗れ父を人質に取られるが、父の命を守りつつ唐への忠誠を貫いた（李姓を賜る）。

夏侯端, 淮左, 帰路を断たれ餓死寸前で野豆を食べて凌ぎつつも、天子の節旄を肌身離さず持ち帰った。

羅士信, 穀州, 王世充の慇懃無礼な態度と猜疑心に愛想を尽かし、勇士を率いて李世民に投降。

羅芸（李芸）, 幽州, 北方の有力な軍閥。竇建徳を衡水で破り、唐に帰順して「燕郡王」に封じられる。

許紹, 峽州, 蕭銑の侵攻を撃退。かつて友人であった李靖の窮地を、高祖への嘆願によって救った。

武徳二年の暮れ、李世民は長春宮で見送られながら、奪われた太原を奪還すべく戦地へと向かいました。この出陣こそが、唐が「真の統一帝国」へと飛躍するための、最初の一步となったのです。